

本郷・駒籠高林寺：緒方洪庵追責碑と節齋岡先生碑

堀 江 幸 司

東京女子医科大学図書館

(1993年8月10日受理)

満開の桜よりも、盛りを過ぎ新葉が芽吹きはじめたころの桜が好きである。染井吉野桜は、樹皮の灰黒色と淡紅白色の花と新葉の色の調和が美しい。だが、山桜の紅褐色の新葉とともに咲く淡紅色の花の方が、より美しいかもしれない。昔は、山桜を植えていた邸も方々にあったようだが、今では、山桜は都内ではあまり見られなくなってしまった。本居宣長は、満開の桜を「朝日に匂う山桜花」と詠じている。しかし、やはり、染井吉野桜は散りぎわが好いと思う。

わたしは、「そめいよしの」（東京都の花）の里、駒込（染井よしの町会内）に住んでいる。六義園（りくぎえん）（東京都特別名勝）の近くである。六義園の染井門から JR 山手線（旧省線）（しょうせん）に架かる「染井橋」を渡って「染井霊園（染井墓地）」にいたる「染井通り」の JR 側である。子供の頃（昭和30年代）、「染井能楽堂」横の松平邸内には、見事な染井吉野桜の古木が何本もあり、家の2階から花見ができたものである。この桜の樹もマンション（カーサ駒込・染井ハウス）建築のため切り倒され、今、昔の桜の樹が残っているのは、「JR 東日本駒込住宅」内と「染井霊園」内ぐらいになっている。

「染井通り」を歩いてみた。曹洞宗泰宗寺（たいそうじ）の染井吉野桜だけが保護樹木（平成2年10月・豊島区第455号）となっていた。駒込の染井周辺は、かつて、植木の里として有名で、日光街道に沿った農家では、庭木や盆栽がつくられた。「そめいよしの」は、幕末頃に、染井植木屋によって売り出された桜で、エドヒガン（江戸彼岸）とオオシマザクラ（大島桜）とを交配した雑種といわれている。¹⁾ 一方、ヤマザクラ（山桜）は、日本の野生桜の代表で、古くから愛好された気品のある園芸種である。今、駒込というと、染井吉野桜よりも JR 駒込駅の「ツツジ」の方を思い出す人の方が多いかもしれない。

日本橋から JR 駒込駅前を通過して、西ヶ原（にしがはら）・二本榎（にほんえん）、飛鳥山（あすかやま）、王子方面に通じる街道が、本郷通り（旧岩槻街道・日光御成道）で、緒方洪庵の墓がある駒籠高林寺（こうりんじ）は、本駒込1丁目交差点脇に位置している。日本医科大学（文京区千駄木）の近くである。

高林寺²⁾ (本尊・大和金峯山蔵王権現開山桂巖和尚) は、現在の文京区向丘2丁目 (旧本郷区駒込蓬萊町・ほうらいちょう) に移転する以前は、御茶ノ水の神田山の麓 (現在の順天堂医院のあたり) にあった。^{3,4)} 明暦3年 (1657) に発生した大火 (明暦の大火) 後、駒籠 (駒込) (こまごめ) に移った。順天堂医院のあたりにあった当時、境内から名水が湧き、白州全龍和尚が将軍のお茶用に献上したので、御茶ノ水の地名が起こったといわれる。⁵⁾ 現在、JR 御茶ノ水駅前交番横に「お茶の水」の記念碑 (昭和32年<1957>9月9日除幕) が建っている。この碑は、当時の高林寺住職 (田中良彰氏) の発案によるもので、石垣には高林寺の鐘撞堂の石が利用された。⁶⁾



高林寺門 (1993. 3. 28 堀江幸司撮影)

昭和61年 (1986) に、高林寺の写真を撮りに行ったことがある。もう7年も前のことである。同年1月25日に岡山市足守 (あしもり) に緒方洪庵の誕生地を訪ねたので、⁷⁾ 墓所も取材しておこうと思ったのである。誕生地の取材は、川崎医科大学附属図書館の樋口明美さんが自家用車で案内してくださったのでスムーズに行き、松本稲郎さんの紹介で足守文庫もみることができた。緒方洪庵訳書 (病学通論三卷、扶氏経験遺訓三十卷) 等が収蔵展示されていた。「洪庵緒方先生碑」 (岡山県指定史蹟) の碑文も近水園 (おみずえん) 近くの「岡山市立足守図書館」所蔵の資料から写すことができた。川崎医科大学附属図書館の湊泰子さん (主任司書) をはじめとする館員の方々のご好意と、日和に恵

まれた吉備路の取材旅行を思い出す。しかし、高林寺の取材は、自宅から自転車で5分という近場の割には、苦勞させられた。本郷界限（江戸のころは武蔵国豊島郡くとしまごおり）は、昔から寺院が多く、高林寺の所在は、前もって見当をつけていたが、なかなか見つからなかった。本郷通りを何度か行きつもどりつした。寺は、本通りに面しているとはばかり思い込んでいたのが間違いであった。路地を入れて、文京区駒本小学校の横が、高林寺の門となっていた。この時、緒方洪庵の墓域の前には、記念メダル（東京銀座・天賞堂製）販売の案内があったので、記念に買い求めておいた。そして、今年、平成5年（1993）は、緒方洪庵の歿後130年にあたる年なので、改めて、高林寺を詣でた。高林寺の標柱も新調され、文京区教育委員会による史跡案内（平成3年3月）があった。以前、建てられていた「史蹟緒方洪庵墓（大正十四年五月建設東京）」の木柱は、墓地内の隅に朽ち果て置かれていた。



緒方洪庵墓域（1993. 3. 28 堀江幸司撮影）

緒方洪庵の墓域は、本堂正面に向かって左側後方（北側）に位置している。さすがによく整備されている。中央に「侍醫兼督學法眼緒方洪庵之墓」、左に「緒方洪庵先生夫人億川氏之墓」の墓碑があり、右に、追賁碑が建つ。左手の隅には、「緒方洪庵」の案内版が置かれている。案内板には以下のように刻まれている。

緒方洪庵 医学者 蘭学者 教育者
奥医師 法眼 医学所頭取

文化七年七月十四日 (1810) 備中足守に生る
天保九年 (1838) より文久二年 (1862) まで
大阪に適々齋塾を開く

文久三年六月十日 (1863) 江戸にて没五十四才
花陰院殿前法眼公哉文肅大居士

文久三年六月十二日 (1863) 高林寺に埋葬

明治四十五年七月十日 (1912) 追責碑建立

大正十三年二月五日 (1924) 東京府史蹟指定

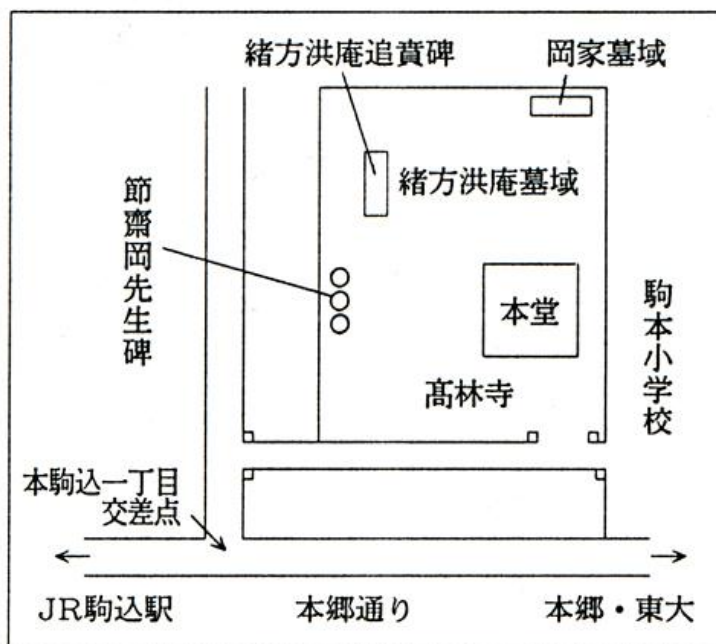
昭和十一年六月二十二日 (1936)

道路拡張のため現在位置へ移転

昭和四十三年六月十日 (1968)

追責碑移転整備

昭和四十三年 建之



高林寺境内略図 (1986年1月 堀江幸司作成)

追 賁 碑

天保中洪庵緒方先生起家藝於大阪授徒西學前後從之游者盈三千人先生雖專醫面其聚學徒也苟有欲

讀西書者則包容莫拒不復間其所業為何也迨王政維新百事競興皆有待於人材面當時率職司局者則多

出於先生之門矣先生易簀之後四十有六年於此朝廷褒揚前功追贈從四位乃書於石樹之墓側名曰追賁

之碑蓋以紀殊恩也

明治四十二年六月八日

從四位勲二等功三級 森 林太郎 撰

正五位 日下部東作 書竝篆額

緒方洪庵は、文久3年（1863）6月10日に下谷御徒町医学所頭取屋敷で突然の大咯血により死去する。大坂から江戸へ出てきた翌年のことで、来ん庵の仕事は大坂で終わって墓だけが江戸に残ることになる。

現在の墓碑は、その後、慶應3年（1867）3月になって建立された。墓碑の裏に「墓碑銘」があり、緒方洪庵の「墓誌」（経歴など）および「銘」（詩のような韻文）が漢文で刻まれている。古賀謹一郎の撰文、三沢精確の書である。古賀謹一郎（文化13年<1816>～明治17年<1884>）は、名を増（まさる）茶溪または謹堂と号し、漢学、洋学に勝れ、幕府儒官の職務の外に、蕃書調書の頭取をしていた人物である。さらに、明治42年（1909）緒方洪庵が正四位に追叙されたのを記念して追賁碑の議が起こり、明治45年（1912）7月10日、建立された。7月10日午後2時、高林寺において五十回忌の法要が営まれ、遺族および親族ならびに門人らが参拝した。⁸⁾ 来会者は花房義質、池田謙齋、今村有隣、石坂惟寛、明石弘、森林太郎（鷗外）などであった。午後3時より高林寺住職田中惟喬氏、以下7名の僧侶によって本堂前にて読経が開始され、読経終了後、緒方 次郎以下一族、参会者一同の焼香があり、境内の洪庵の墓に詣でたという。⁹⁾ 追賁碑は、森林太郎（鷗外）の撰文である。これも漢文で、当然のことながら、句読、返り点、添仮名（送り仮名）もない白文である。¹⁰⁾

書の日下部東作（天保9年<1838>～大正11年<1922>）は、彦根藩士田中氏の二男として生まれ、日下部家を継いだ書家である。鳴鶴（めいかく）と号し書道界の奉斗と仰がれた。当時、鳴鶴流の書流があった。

この墓域の下に緒方洪庵がかめに入れられて¹¹⁾、葬られていると思うと、なにか、おそろしい気持がした。

今回の緒方洪庵の追責碑の撮影には苦労させられた。追責碑にあたる光の具合がどうもよくなく、朝、昼、夕方と撮影を繰り返したが、技術不足のためもあり、どうも、気に入った写真が撮れなかった。しかし、足繁く通ったおかげで、思わぬ発見があった。ふと、緒方洪庵の墓域に向かう墓道の左側に大きな石碑が建っているのが、眼に入った。仰ぎ見るばかりの自然石に「節齋岡先生碑」と刻まれている。侍医だったことは、浅学のわたしにもわかった。そこで、この岡節齋の調査を始めることになるのである・・・。



節齋岡先生碑（3つ並ぶ石碑の中央の碑）（1993. 3. 28 堀江幸司撮影）

岡節齋なる人物を調査するに際して、まず、『皇國名醫傳』¹²⁾（浅田宗伯著）にあたってみた。しかし、これには記載がなく、調べた範囲では『医家先哲肖像集』¹³⁾（藤波剛一著）と『東京掃苔録』¹⁴⁾（藤波和子著）に載っていることがわかった。『医家先哲肖像集』の題字は、岡節齋の子孫にあたる岡麓（ふもと）の手になるものであった。

岡麓（1877～1951）は、本名を三郎といい、「アララギ」の歌人で、幕府医官の岡家が先祖である。岡良節（りょうせつ）が父にあたる。岡麓は明治32年（1899）に本郷・金助町（きんすけちょう）（現在の文京区本郷3

丁目12, 13番あたり)に家を新築した際に正岡子規を招いたりしている。岡麓の墓は、緒方洪庵の墓とともに高林寺にあり、文京区史跡に指定されている。文京区の史跡案内を読みながら、緒方洪庵の墓が史蹟となるなら、岡麓の先祖の医家の墓も史蹟に指定されてもよいのではないか、と思ったりする。

ところで、岡節齋の歿年は二書とも違っている。『医家先哲肖像集』では弘化25年、『東京掃苔録』では嘉永元年となっている。そこで、「節齋岡先生碑」で確かめてみると「弘化五年 申先生歳八十有五」と刻まれていた。弘化5年は2月28日で嘉永元年に改元する。記録に残すということは、恐ろしいことだと思ったものである。

岡家の墓所は、墓地の右手の径を行って一番奥にまとめられている。「江戸幕府の医官をつとめた岡家には、岡家重を祖とする家系、岡了節を祖とする家系、岡道琢を祖とする家系の三家がある」。¹⁵⁾ 高林寺の岡家の墓所は、この三家のうち岡了節の墓所である。

岡宗観の墓を中心として、歴代の墓が並ぶ。江戸時代最後の粹人・成島柳北(なるしま・りゅうほく)(1837-1884)と交際があった栗本鋤雲を蝦夷地へ左遷したという岡櫟仙院の墓もこのなかにある。ほとんどの墓石には、墓をめぐるように碑文が刻まれている。



岡家墓域 -奥に「岡麓之墓」がみえる- (1993. 7. 31 堀江幸司撮影)



本郷・駒込高林寺の岡家墓域見取図 (1993年1月 堀江幸司作成)

「節齋岡先生碑」が建てられたのは、明治12年(1879)のことである。明治12年(1879)といえば、明宮嘉仁(はるのみやよしひと)親王(のちの大正天皇)が生まれた年で、浅田宗伯(あさだ・そうはく)が侍医を命ぜられた年である。漢方医家が「温知社」を組織して「温知医談」を刊行した年でもあった。¹⁶⁻²⁰⁾ 浅田宗伯(文化12年5月22日生。明治27年3月16日歿)は名を惟常(これつね)、幼名を直民(なおたみ)といい、栗園(りつえん)と号した明治漢方最後の巨頭である。この浅田宗伯は、書生時代に岡桐蔭の門をたたいたことがあったが、岡桐蔭は、浅田宗伯を門前払いにしたという。しかし、どういう思いからか、浅田宗伯は明宮の侍医となった時に、今村了庵とともに岡桐蔭も侍医に推挙したと言われる。このことは、美談として語られている。²¹⁾ そこで、岡家の墓所を調査するにあたって、この岡桐蔭の墓誌から見てみることにした。しかし、岡桐蔭の墓石に墓誌はなく、また、肝心の岡節齋の墓石にも墓誌がないことが、わかった。このことから、明治12年の漢方復興運動の時代にあって、明宮の侍医になる岡桐蔭が岡節齋の歿後30年にあたり顕彰碑として、石碑「節齋岡先生碑」の建立を計画したものと思われた。

岡家歴代の墓石に刻まれた墓誌から岡宗観、岡勁齋の経歴の一部をみてる。

岡宗観は、諱（いみな）（死者の生前の本名・実名）は正久，字（あぎな）（別名・呼び名）は意伯。通称は了節。満治2年（1659）2月22日歿。年56歳。

岡勁齋は、諱は茲，字は子明，通称は了允，節齋の嗣子，幕府医官となり法眼（ほうげん）に叙せられ，「小児戒草」（文政3年<1820>）の著がある。文政13年（1830）7月29日歿。年40歳。

「節齋岡先生碑」には，岡勁齋の経歴について以下のように刻まれている。（抜書き）（原文は縦書）

岡勁齋は，医学を山田圓南に，文を山本北山に学ぶ。西城の侍医。法眼に叙せられ，奉職51にして法印に叙せられた。弘化5年（1848）85歳のとき病に罹り，2月2日歿す。孫の桐蔭が，65歳で，後を継ぐ。

故幕府侍医法印節齋岡先生碑	成島弘撰文
學醫于山田圓南學文于山本北山邸	
明和元年甲申十二月 生於傘谷	
弘化五年 申先生歳八十有五羅疾	
然而逝 二月二日也	
孫承後即桐蔭君也桐蔭君今 六十有五	
岡氏之先 母乃醫王 不特三世	
世世出良 静脩之徳 于祖有光	
繩繩子孫 継緒流芳	
明治十二年巳卯三月 正四位松平齋民篆額	
	市河三兼書

故幕府侍医法印節齋岡先生碑（碑文の一部）（原文は縦書）

岡家の墓所を辞し，本郷通りに出た。地下鉄（南北線・平成5年6月現在，赤羽岩淵一駒込間開通）の工事が進行中である。子供の頃，本郷通りには，都電（チンチン電車・路面電車）が走っており，よく日本橋の三越まで行ったことを思い出す。本郷通りを御茶ノ水方面に向かい春の風にさそわれて歩く。赤門から東大医学部構内に入ってみた。ベルツ・スクリバの銅像前の桜も綺麗で

ある。この桜並木を見ながら、ふと、草野心平の詩〈さくら散る〉が脳裏をよぎった。

光と夢といりまじり
ガスライト色のちらちら影が
生まれては消え

はながちる
はながちる
東洋の時間のなかで
夢をおこし
夢をちらし

高林寺の取材をはじめた頃、駒本小学校の校庭から高林寺の前庭（駐車場）に枝をのぼす桜は、まだ、咲きはじめの時期であった。一応の取材を終えた今、もう、すっかり葉桜となっている。今年は、花冷えの日が続き、長く華やかで陽気な桜の季節を楽しむことができた。

本郷・駒籠高林寺の境内は、東洋の時間のなかで、漢方から蘭学への時間の流れを感じさせる不思議な空間であった。

注) 六義園の染井門：常時閉鎖されていたが平成5年6月より11月まで土曜・日曜・祝日に限り開門。

参考文献

- 1) 巢鴨のむかし. 第二集. 巢鴨のむかしを語り合う会, 1992.
- 2) 本郷の寺院 一街と寺誌. 本郷仏教会編, 1984.
- 3) ぶんきょうの史跡めぐり. 東京都文京区教育委員会, 社会教育課編, 1990.
- 4) 文京の文化財 一指定文化財の解説-. 東京都文京区教育委員会, 1978.
- 5) 中村 薫. 神田文化史. 神田史蹟研究会, 1935.
- 6) 坂内熊治. 駿河台史. 1965.
- 7) 堀江幸司. 緒方洪庵誕生地. 医学図書館 1986 ; 33 (2) : 204-5.

- 8) 洪庵忌. 医海時報 942号, 1078. 1912.
- 9) 緒方洪庵五十回忌. 東京醫事新誌 1777号, 1621. 1912.
- 10) 緒方富雄. 緒方洪庵伝 (第2版). 岩波書店, 1963.
- 11) 緒方富雄. 緒方洪庵墓の移転. 蘭學のころ 弘文社, 1950 ; 414-425.
- 12) 皇國名醫傳 浅田宗伯 (醫家傳記資料 下 収録) 青史社, 1980.
- 13) 藤浪剛一. 医家先哲肖像集. 国書刊行会, 1977.
- 14) 藤浪和子. 東京掃苔録. 八木書店, 1973.
- 15) 小曾戸洋. 都下医家名墓散策 (15) 岡甫庵 (寿元). 漢方の臨床 1989 ; 36 (8) : 1539-41.
- 16) 山田重正. 典医の歴史. 思文閣出版, 1980.
- 17) 珠玖捨男. 日本小児科医史. 南山堂, 1964.
- 18) 明治前日本医学史 第5卷 増補復刻版. 日本学士院日本古医学資料センター, 1978.
- 19) 富士川游. 日本医学史 決定版. 日新書院, 1944.
- 20) 矢数道明. 近世漢方医学史. 名著出版, 1982.
- 21) 浅田宗伯先生 近代名醫一夕話 第一輯 (日本醫事新報臨時増刊) 日本醫事新報社, 47-80. 1937.

(平成21年10月4日 個人リポジトリ登録)